

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

⑭

田宮 治

負けてたまるか!

犬群はますます勢いづき、「ジジ、ここだぞ。早く来いよ」と呼び続けている。いつもなら「そろ頑張れ。ジジが来たぞ!」と、怒鳴れば届く絶好の場所に立っているのだが、今回は迂闊に動けない。

この篠竹の大藪は、見た目の絶景とは大違いで、分け入ったら最後、身動きもままならない。蔓草が篠竹に絡まり自然の垣根状の塊が至る所で行く手を遮り、まるで迷路のような恐ろしい所である。

猪はここをバリバリと篠竹をへし折りながら突進できるが、獵人や犬たちは垣根状の塊が行く手を邪魔して通ることができない。猪は戦う時、必ず一番弱点のお尻を

守りながら、前方の犬たちだけに傾注して攻撃して来るので、一流芸をもってしてもなかなか止め切れない。

この場所では何度も戦っているが、五〇メートルくらい進むのに二十分もかかるといった有り様で、いつもあと少しのところ猪に逃げられていく。そして、また猪を止めるが、同じことの繰り返しで、猪はついに七、八〇メートルくらい小沢伝いに逃げ延びて、大杉林で二手に分かれる。左手に下っている小沢がいつもの逃走路で、良いタツ場である。

「さて、どうしたものか……」と、犬たちの鳴き声に急ぎ立てられながら、この大篠藪が見渡せる出峰でヤキモキしていると、犬たちが大篠藪の右平を、止めてある私の車のほうを目掛けて突っ走っ

て行った。犬群はまだ猪のすぐ後ろに付いているらしく、ワンワン、キャンキャンの連続鳴きである。峰道から三〇以下の篠竹の藪で止まっては走りの繰り返しで、バリバリと音を立てながら遙か下のいつもの大杉林にゆっくりと向かっていく。

この大杉林の中に流れ込んでいく小沢をいつも猪が走るので、三人の時は必ずタツに一人を置くようにしている。今日の猪は逃げ一手のグレ猪である。いつもの大猪が犬群に絡まれながら攻め落とされ、必死で逃げ切るコースではないと判断して、グレ猪のたどると思われる反対側に北嶋氏を配置した。

「しまった! やはり大猪のコースだったのか。今から走ったところで間に合わない。さて、困っ

たことになった」と、いつも困った時の犬頼みを決め込む。そして犬群が猪をウターンさせて戻って来ることを信じて固唾をのんで見守っていた。

犬群は、私の気持ちなどお構いなしに、反対方向の道端に止めたパジェロのほうへ遠ざかって行く。北嶋氏を呼ぶが応答なし。「万事休すだ!」と思ったその時、

何と車の中で待機していたブイ号、カツ号、武蔵号、千代号が物凄く鳴き声で一斉に咬え始めた。まさに困った時の犬頼みで、こんな奇跡で私を助けることになったのである。

マロ号、ヨシ号、シロ号の追鳴きに見事に反応し、友犬なればこそこの実に素晴らしい威嚇である。この作戦は私がまだ若い頃、山梨や群馬の山でよく使った猪猟



(上)「ほら、その先に何かあるよ」。猪のあばら骨1本を探している60日の仔犬たち。探し当てると、競って取り合いになり大騒ぎである。これも一つの訓練である

(下) 雨でも雪でも、完成した一流犬でも仔犬であっても、毎日欠かさずに綱を持って訓練することが一番大事な上達の道である。名前を呼び、言葉をかけ続け、猟場では車から放して、言葉で分かるようになるまで鍛え上げることである

の一手である。

この奇策は、犬群の止め芸がいま一つで、猪を思う所で止め切れなく、どうしてもタツ一人が必要であるという時に使う手である。

つまり、猪の逃げ道に単独猟で時々使っている犬を残し、後ろのドアを開け、放しにしておいてタツ役として犬に鳴かせるのであ

る。

ところが今回、そんなことを考えて後ろのドアを半開きで窓を少し開けておいたわけではなかった。あくまでも犬たちが良い空気の中で楽に待っていていられるようにと気を付けていた。ただそれだけのことだった。

それが実にタイミングよく、車

から三〇メートルくらいまで近づいて来たマロ号たちに反応して車から飛び出し、合流して一緒に猪と戦ったのである。

大杉林を目指していたグレ猪は、この吠え付きに敏感に反応した。すぐに急旋回して小沢に飛び降り、反対側の大藪平をどんどんとこちらに向かって来ている。

「しめたぞ！ よしよし、これで上等だ」と、ホッと一息ついて、大篠藪を改めて眺めていた。

この大篠藪は千葉でも特別に広く、八〇〇〜一〇〇〇メートルくらいはある。小沢を挟んで両平は山の峰まで一面が篠竹原である。遠目に見るときれいに手入れされた芝生のようで、立ち木も小沢に下りている出峰の三本以外にはない。

犬たちが猪を追い縋っている南側の山肌一面は日が当たって、黄金色に輝いている。その中をワンワン、ギャンギャンと鳴き、バリバリと音を立てながら凄いい勢いで、最初に越えようとしていた一番奥の峰筋にある凹地を目掛けて突っ走っている。

「よしよし、その調子だ。頑張れ」と見ていると、思ったとおりコースで、北嶋氏の待っている、今朝見切った猪の渡り方向に走り出した。

私は急いで峰筋の小道に戻り、犬たちが越えた凹地の裏に回り込むように猪道に出た。既に犬たちは、その先にある孟宗竹と大杉林を突き抜け、大山の下に広がる



下草のない大杉林で、きっちと止め切る猪犬こそが一流猪犬だと思う。  
ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の兄妹犬の見事な止めの現場

荒らしから反対側の大山の間を縫うように流れている大沢伝いに猪を追っている。その様子はGPSにはっきり映し出されているが、もう鳴き声は聞こえない。

私は小峰を越えて大山を必死で登った。北嶋氏が車で走って、移動タツに専念している七曲がりの道路を右下に見渡せる大峰に出た。

流れ出る汗をタオルで拭いながら、「取れますか、どうぞ!」と呼び出しをかけると、元気な声で「どうぞ!」と返ってきた。

「大藪からやっど追い出したマロ号たちが、いま反対側の大沢を登っている。いつもの小沢奥の詰めを越えれば、今朝見切っていた渡りではなく、五〇〇メートル下の小沢辺りに行きそうだ。GPSをよく見て、よろしく!」と、やっど取れた連絡に大事な勢子役の第一報ができてホッとした。

### グレ猪が相手

そして気持ちを変え、北嶋氏の走っている県道と犬たちが猪を追

っている大沢の真ん中に、どっか居座る大峰筋をどこまでも走り続けていた。ただ犬たちからはかなり引き離されており、走るというより早足で歩く程度である。

犬たちはまだまだ元気で、七〇〇メートル先の大峰を越えて小沢を下り、北嶋氏の待つ県道に向かっており、さらにその先の見通しの悪い杉林の中のような。

それでも、北嶋氏が迎え撃ってくれるだろうと期待して見守っていたが、猪は何事もなかったかのように県道をあっさり突破してしまい、あっという間に向かいの大山に逃げ込んで行った。

「北嶋さん、取れますか、どうぞ!」

「もう少しだった……予想に反して大杉林と藪伝いに道を越えてしまった。この猪はいつもの猪のよう、また大山を回って七曲がりに向かっている」と、北嶋氏は悔しそうである。

「分かった。それでは私はまた戻って、大篠藪のほうに行く」と告げて、改めて立ち止まり、念入りにGPSで犬たちを確認した。

今度は犬たちと正面から突き当たるようになるので、静かに攻め進んで、場合によっては猪を迎え撃たなければならぬ。

犬群は凄いい勢いで北嶋氏が車で走っている道の向こう側の大山まで越えて、その山の裏側をどんと突き進んでいる。七曲がりの先に広がるあの大篠藪に戻るつもりらしい。

元氣な北嶋氏は犬たちを必死に追っているようで、「この猪は七曲がりに戻りますよ。大藪で勝負をかけましょうか！」と意気込んでいる。

「それは駄目だ。この猪はいつもの手練だから、逃げるのに勝手知ったあの大篠藪を利用するから、大藪で止まることはない。必ず今回の大きく山を回るコースをたどるはずだ。だから、作戦とおりに道を車で走り、先ほど猪が突き抜けた辺りを重点的に移動タツに徹してくれ」と告げた。

そして何より、こんな時のためにとっておきの言葉で、「なあに……、こんな猪ぐらい何でもないよ。マロ号たちが逃がすはずがない。

い。絶対にどこまでも追って止めるから、大丈夫だ！」と元氣づけて、最後まで諦めないことを教える。

こうなったからにはマロ号、ヨシ号、シロ号の三頭でなければ絶対にできない、猪止めの獺の限界に挑戦する持久戦に何としてでも持ち込みたい。

この頂点に立つ鎖の一戦は、何があんでも必ず勝たなければならぬ至上の大勝負となるだろう。

だから、田宮系猪犬群（一軍十二頭）の中でも特に自慢の一流芸の犬たち七頭を厳選して、今回の大作戦を練り上げ、これ以上できない攻めの術を駆使して戦いを敢行しているのである。

何とか至難の大篠藪からグレ猪を追い出したというのに、こともあろうか、猪は一時間以上も山谷を逃げ回った挙げ句、またあの大篠藪に逃げ帰って来た。何という逃走術に長けた手練であろうか。

この予想外の展開に内心驚いていたが、こんな時にどんな考え方をするか重要な意義を持っている。物事の完成や達成には前向き

で、その場に合った合理的な考え方に立った緊急の善後策が物をいい、突き当たる至難を乗り越える決め手となるのである。

ごく当たり前の猪止め犬群による猪藪では、犬群を放して三十分くらいが勝負の分かれ目である。この一戦のように、犬群が見せつけた素晴らしい一気の寄り付き

と、見事な射竦めの攻撃にもかかわらず、一時間以上も逃げ回られた場合は、一般的な結果でいえば負け戦であろう。

しかし、この実戦で大事なことは、ここからの戦いをどのように立て直し、勝ち戦に繋げるかということである。

今日の一戦は頂点に立つための特別な戦いで、激戦となることは前もって分かり切っていたことである。それでも猪さえいれば上等で、居残りのグレ猪がどんなに逃げ上手の手練で、攻めにくい大篠藪であっても、この難関を乗り越えて勝つことが、何よりも大切な猪藪の極致を知ってもらう礎になる。

その考えで、あえて苦しい戦い

方を実戦で噛みしめて次世代まで繋いでほしいと思ひ、北嶋氏と二人だけで戦いを挑んでいるのである。

ここまでの戦況が劣勢なのは当たり前で、名だたるグレ猪が相手であり、戦いの場が大篠藪なのだから仕方ないことである。ことさら犬群の芸が悪いからでもなく、まだまだ追い続ける大事なところであり、負けたわけではない。

ここで言っておきたいことは、犬たちの成長した勇姿であり、猪止め芸の凄さである。

わが犬群が、ここ二年間の実戦で見せつけた芸域の高さは既に完成しており、半端なものではない。いつも完勝し、そのたびに芸域を広げて芸質を極めていく。その先々での実戦は素晴らしい成果を積み重ねることで、見る人びとを圧倒し、若者たちには限りない夢と希望を与えてくれる。

そして、猪藪の極致を知らしめ感動させてくれる。さらに全戦にわたって無傷で完勝してくれるので、嬉しく満足している。

(つづく)